

## 事後評価報告書(日ニュージーランド研究交流)

### 1. 研究課題名:「ヒトの生涯にわたる健康に及ぼす乳幼児期の栄養ならびに腸内菌の影響」

### 2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者: 東京大学大学院農学生命科学研究科 教授 伊藤 喜久治

2-2. ニュージーランド側研究代表者: アグリサーチ 食品・代謝・微生物研究チーム  
チームリーダー Nicole Roy

### 3. 総合評価:( C )

### 4. 事後評価結果

#### (1) 研究成果の評価について

栄養及び腸内フローラの研究者が連携し、分子栄養学及びノバイオ技術を用いて、腸内菌及びミルクオリゴ糖の摂取による腸管機能開発を指標に宿主-腸内菌-栄養の関係を明確にする試みは新しく、ヒトの健康を考える上で重要であり、新分野の開拓につながる研究である。

ニュージーランド側のヤギミルクのオリゴ糖の分離・精製がスケジュール通りに進まず、平成24年2月の受領となり、しかも精製度が約50%と低かったため、当初予定していた病態モデルマウスを用いた評価を実施できなかった点は残念である。国際共同研究ならではの難しさもあると思うが、情報交換や研究連携の進め方、研究プロジェクトのスケジュール管理が課題である。

また、終了報告書に具体的なデータの記載が少なく、得られた研究成果の詳細がよく分からなかった。

#### (2) 交流成果の評価について

日本とニュージーランドの間で、相互に大学院生を派遣して、実験を進めていく中で、有益な経験が得られ、人材育成につながっている。また、研究者の相互訪問やシンポジウムの開催を通じて、双方の国における研究者や民間企業を含めての交流ができ、今後の共同研究や新しいプロジェクトにつながる可能性があることは評価できる。

本研究の成果については、可能な限り、学会等での連名の発表を行うべきであると考え。また、共同研究での大学院生の長期派遣は有意義であるが、より多くの人材育成にも努めるべきと考える。

#### (3) その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

本研究は機能性食品における先端的研究として大変に意義深いものであると思うが、両国間の研究スケジュール管理がうまくいかなかったことも影響して、最終的な動物での評価実験まで至らなかったことは大変に残念である。研究体制及び研究計画は魅力的なので、本課題での問題点を改善し、今後も研究交流を継続して頂きたいと思う。